# 広島県竹原市における製塩業盛衰の歴史

松澤　希

## Ⅰ．はじめに

近世中国筋の代表的な特産品のひとつに塩があげられる．江戸時代初期に開発された「入浜式塩田」は，瀬戸内 10 国を中心に築造され，日本の製塩の主流となっていった．瀬戸内海に面する 10 国で作られた塩は「瀬戸内十州塩」と呼ばれ，近世中後期には，瀬戸内で生産された製塩高は全国の製塩高の 8 割以上であったとされる（落合，1991）．

広島県においては，現在の竹原市や福山市において製塩業が発展した．特に竹原市は，広島において初めて入浜式塩田が作られ，製塩業が発展した地域である．そこで，広島県でその中心となった広島県竹原市（図 1）における製塩業の盛衰について，当時の文献史料や現在までにまとめられた資料から考察する．

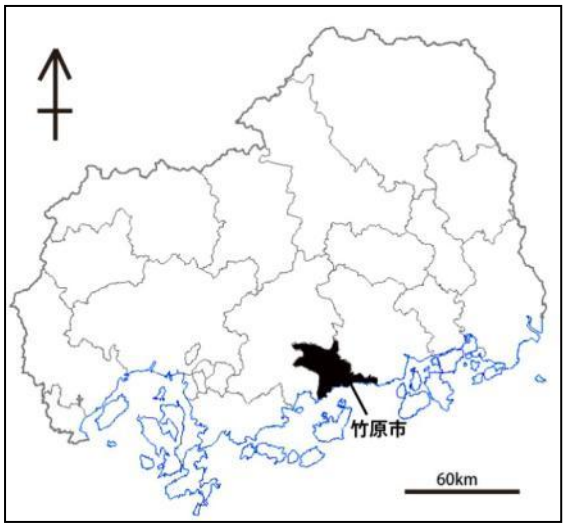


図 1　対象地域

## Ⅱ．竹原市における製塩業の盛衰

（1）販売市場

竹原市で作られた「竹原塩」の販売市場は『広島県塩業史』（1960）によると，表 1 のようになる．

表 1　「竹原塩」の販売市場

| | | |
|---|---|---|
| 北 国 | 新潟県 | 糸魚川･今町･柏崎･出雲崎･寺泊･新潟･荒川 |
| | 山形県 | 庄内･酒田 |
| | 秋田県 | 加茂･本庄･秋田･能代 |
| | 青森県 | 津軽･ああか沢･青森･南部 |
| | 北海道 | 松前 |
| 江戸･東海 | 名護屋･清水･野間津･津川･江戸 | |

『広島県塩業史』を参考に作成

表 1 のように販売市場は，大別すると北国と江戸・東海方面である．また『広島県塩業史』（1960）によると，竹原塩はさらに内陸部に移送されていた．大量の竹原塩が甲府に流入，嘉永ごろ信州松代藩領に 6,600 俵（879 両 3 分）の竹原塩が越後今市経由で流入などの事実が確認されている．

（2）塩田面積の変化

『瀬戸の海に輝いた塩の町　たけはら』（2005）によると，竹原市では 1650（慶安 3）年，沖口沿いに 31 軒の塩浜（慶安の古浜）を築造した（図 2）．この塩浜が予想以上の利潤をあげたことから，1652（承応元）年に新浜 67 軒を増築し，計 98 軒の塩浜ができた．その後も分け浜（塩浜の統廃合）を繰り返しながら塩浜も新しく開発が進んでいく．1910（明治 43）年には，図

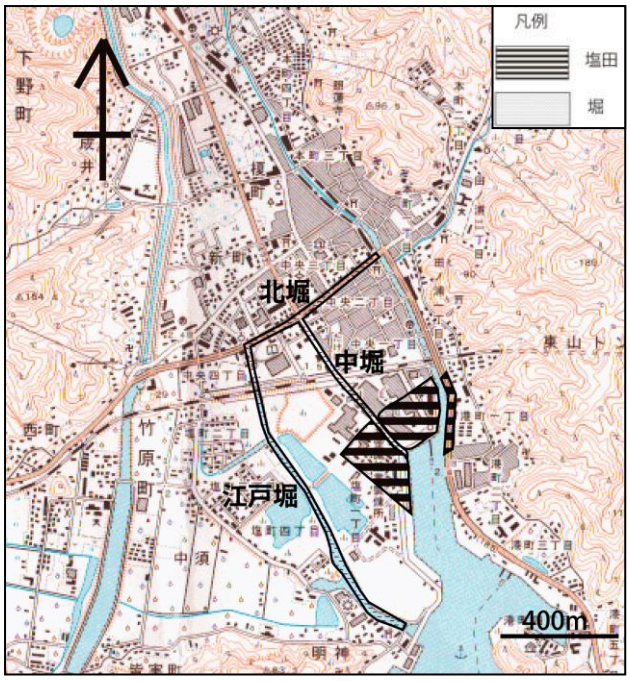


図 2　1650 年の塩田

国土地理院　地形図「竹原」を使用

3 のように塩田が広がっていた．しかし，1959 年の第 3 次塩業整備により，塩田はすべて廃止された．

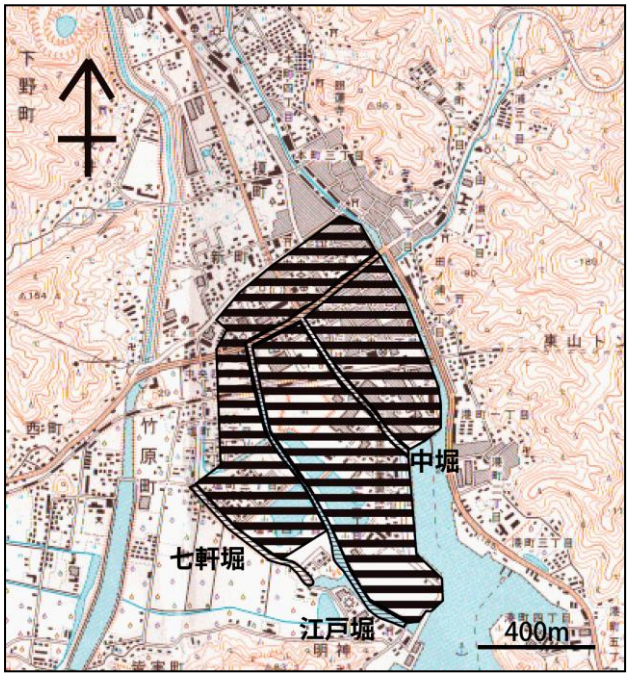


図 3　1910 年の塩田

国土地理院　地形図「竹原」を使用

（3）生産高の推移

竹原では表 2 によれば享保初年には 26 万 7000 俵の生産をあげたが，宝暦末年には 20 万俵を割り，それが漸次減少し，慶応年間（1865～68）には 12 万俵となり，最盛期の半分以下に減少した．この減少の原因は，十州同盟による休浜法がひとつにあると考えられる．元禄から正徳年間（1690～1715）にかけて，竹原以外の瀬戸内でも塩田の開発が急激に進んだことから，生産過剰をまねいた．そこで休浜法が考えだされた．これにより，塩の生産が減少する．また，もうひとつの原因として，「中期入浜」の宿命的な災害による塩田破壊に求めることができる．当時の技術では，塩田の位置選定がどうしても災害を受けやすい場所に位置していた(『日本塩業体系　近世(稿)』, 1982)．

表 2　竹原塩田生産高の推移（年間平均）

| 年代 | 製塩高(俵) |
|---|---|
| 元禄12～1(1699~1703) | 246,470 |
| 宝永1～5(1704～08) | 257,979 |
| 宝永6~正徳3(1709～13) | 260,114 |
| 正徳4~享保3(1714～18) | 267,841 |
| 享保4～8(1719～23) | 243,597 |
| 享保9～13(1724～28) | 234,166 |
| 享保14～18 (1729～33) | 246,903 |
| 寛延2(1749) | 209,420 |
| 宝暦8～9(1758～59) | 208,821 |
| 宝暦10～12 (1760～62) | 168,614 |
| 明和1～3 (1764～66) | 156,054 |
| 文化12～14 (1815～17) | 185,333 |
| 文政1～4(1818～21) | 181,621 |
| 弘化2～4 (1845～47) | 156,164 |
| 慶応1~明治1(1865～68) | 119,967 |

また, 1845 年の竹原塩の供給先及び販売高は表 3 のようになっている．

表 3　1845（弘化 2）年竹原塩の供給先及び販売高

| | 販売高(俵) | % |
|---|---|---|
| 北国 | 83,443 | 50 |
| 江戸 | 74,487 | 45 |
| 領内 | 8567 | 5 |
| 計 | 166,497 | 100 |

『広島県塩業史』を参考に作成

## Ⅲ．考察

地図への塩田の位置をマッピングしたことから，大きく塩田が広がっていることがわかった．

竹原塩は甲府や信州といった内陸部まで移送されていることから，全国に竹原塩が広まっていたことが考えられる．また，全国に移送されていたことや表 3 から，竹原塩生産は，領内や周辺地域での塩の消費のためというよりも，商品として他国で売ることを前提とした生産であったといえる．

このように，全国にその名が広まっていた一方で，休浜の導入や塩田が地形的に災害を受けやすい場所にあったことなどから，製塩業が衰退していったことがわかった．

## Ⅳ．おわりに

竹原の「竹原塩」が信州にまで移入していたのは驚きである．そこまで発展した竹原市の製塩業であるが，1959 年の国の政策により塩田はすべて廃止され，竹原市における製塩業には終止符が打たれた．しかし，瀬戸内の他国や国との関係や，地形的な関係など，それ以前に多くの問題から製塩業が衰退していたことがわかった．全国で名を知られるほど発展したからこその衰退であり，地形が関係するといういわば宿命的な衰退であったともいえよう．

## 引用文献

落合功（1991）：近世竹原塩業の成立と構造．

竹原市教育委員会生涯学習課（2005）:『瀬戸の海に輝いた塩の町　たけはら』.

日本専売公社（1982）『日本塩業体系　近世（稿）』.

広島県塩業組合連合会（1960）『広島県塩業史